

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 6日現在

機関番号：14301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011（～2012 繰越）
課題番号：21720327
研究課題名（和文） 現代北インドにおける「不可触民」の仏教改宗運動と生活実践に関する文化人類学的研究
研究課題名（英文） An Anthropological Study about Buddhist Movements and Life Practices of 'Untouchables' in Contemporary North India
研究代表者
舟橋 健太（FUNAHASHI KENTA）
京都大学大学院文学研究科・研究員
研究者番号：90510488

研究成果の概要（和文）：本研究においては、現代北インドにおける「不可触民」の仏教改宗運動と、かれらの自己意識ならびに生活・儀礼実践について、文化人類学的な調査研究を行った。具体的には、改宗仏教徒たちが、地縁関係ならびに親族・姻族関係において多数派であるヒンドゥー教徒と、いかなる関係性を有し、またそれをいかに交渉しているのか、多角的な把握・検討を行った。とりわけ、改宗前後の時間的・空間的連続性を重視し、自己のアイデンティティを交渉しながら他者とのつながりを志向する改宗仏教徒の生の様相に関して、分析・考察を行った。

研究成果の概要（英文）：In this cultural anthropological study, I focused on 'Untouchables' in contemporary north India investigating about Buddhist movements, their identity consciousness, and life and ritual practices. Concretely, I examined how converted-Buddhists had and negotiated their relationships with neighbors and relatives who were mostly Hindu majorities. I paid attention especially to the aspects of temporal and spatial 'continuity', and considered how converted-Buddhists negotiated their own identity and kept relationships with others in everyday life.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	450,000	135,000	585,000
2012年度	350,000	105,000	455,000
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、インド

1. 研究開始当初の背景

まずは本研究の学術的背景のうち、関連する国内外における研究動向から本研究の位置づけを明確にしておきたい。ひとつに「不可触民」研究の動向から、いまひとつにイン

ド社会における「改宗」に関する研究動向から、それぞれ記していく。

ひとつめの不可触民研究の動向であるが、不可触民を対象とした研究は、常にインド社会の特質と目される「カースト」との関わり

において議論されてきた。主に初期には、「構造」の観点から「カースト制度」における不可触民の位置づけについて論じられた。それに対して、「個」の視点からかれらの生活世界に迫った研究がものされ、近年では、「構造」のなかに生きる「個」という観点から、かれらの生活世界を捉える研究が行われている。本研究も、こうした流れを発展的に汲むものである。すなわち本研究においては、「構造のなかに生きる個」という観点から不可触民をとらえていく。構造にしばられるわけでもなく、かといって完全に自律的な個人でもない不可触民の姿を、かれらの生活実践からみられる「仏教徒であり、またチャマルである」という自己意識を軸に考察するものである。具体的には、ウッタル・プラデーシュ州（以下 UP 州）において、他カーストとの関係においても同一カースト内においても、少数派にすぎない改宗仏教徒たちが、他者との関係性の交渉―「絆」の維持・交渉―を第一義にすえて、儀礼実践・生活実践を行っているさまを分析・考察していくこととなる。

ところで、いまひとつのインド社会における「改宗」をめぐる研究動向に関してであるが、これまでの研究においては、不可触民の、特に仏教への改宗に関しては、その改宗前の宗教や関係性との「断絶」が強調される傾向にあった。これは、改宗を「過去との決別」と捉える視座である。つまり、過去の慣習や実践から、いかに脱することができているかに着目し、その程度によって、被差別状況からの脱却の可否（改宗の「成果」）を断ずるという視点である。

こうした視点に対して本研究では、改宗を「過程」とみて、その「連続性」にこそ着目する。つまり過去（ヒンドゥー教）との断絶、対抗という側面ばかりではなく、その「連続性」に視点の重心を移すのである。「改宗」とは、過去（祖先）と現在（自己）そして未来（子孫たち）をつなぐ、「時間的連続性」を担う行為である。また実際に生活を行う上での、親族関係をはじめとする村落内外における人間関係を取り結ぶ、「社会的（空間的）連続性」を担う行為である。本研究においては、この二つの軸における「連続性」に焦点を当てて研究を行っていく。こうした「連続性」に焦点を当てた考察は、先に述べた改宗仏教徒たちの「絆」の希求という実践／意識への着目と呼応するものである。

2. 研究の目的

本研究においては、現代北インドにおける「不可触民」の仏教改宗運動と、かれらの自己意識ならびに生活実践について、文化人類学的な研究を行っていく。具体的には、UP 州を主な対象地にすえて、独立以降漸進的に拡

大している仏教改宗運動と、かれら「改宗仏教徒」（元不可触民、チャマル Chamār）たちの自己意識のありようならびにその発露である儀礼実践・生活実践について、現地調査を基に分析・考察を行っていくものである。かれら現代北インドの改宗仏教徒たちが、地縁関係においても親族・姻族関係においても多数派であるヒンドゥー教徒と、いかなる関係性を有し、またそれをいかに交渉しているのか、すなわち、「構造」（カースト制度）のなかで、いかに「個」として生きているのか、検討を行っていききたい。

以上の学術的背景を受けて当該研究期間においては、現地調査を中心として、現代北インドに生きる改宗仏教徒たちの儀礼実践・生活実践の分析から、まずはかれらの取り結ぶ多様な関係性について検討を行いたい。ここにおいて具体的に対象となってくるのは、(1) 女性、(2) 第三世代の人びと、(3) 同一カースト内における関係性、(4) 村落内部における他カーストとの関係性、(5) エリート仏教徒と「普通の」仏教徒との関係性、(6) 僧侶と平信徒との関係性、(7) 過去（祖先、起源）に対する意識、(8) 未来（子孫）についての意識、これら 8 つの問題群である。以上の問題設定のもとに、現代北インドの改宗仏教徒たちが、地縁関係においても親族・姻族関係においても多数派であるヒンドゥー教徒と、いかなる関係性を有し、またそれをいかに交渉しているのか、より多角的に把握し、分析・考察することを目指す。

またここから、現代インドにおいて不可触民が「改宗」という決意・行為を行うことに関して、文献調査による他地域の事例研究を参照しつつ、北インドの地域的特殊性と同時に、その普遍的側面の考察を行いたい。具体的には、仏教改宗運動の中心地であり部分的には仏教徒が多数派を構成することもある西インドのマハーラーシュトラ州、ならびにキリスト教への改宗が多数を占める南インドの事例を参照して、局所的にも少数派である仏教への改宗という行為による実践の変化と意識の変容に関して考察を行いたい。また普遍的側面としては、独立以降、法的整備・各種の施策などにより、以前より政治・経済的状况には好転がみられるなか、それでも他宗教へと「改宗」を行うかれらの決意・行為に関して検討を行うものである。

3. 研究の方法

上述の本研究の目的を達成するための基盤となるのは、何よりも現地調査と、そこで得られたデータと見識を学術的に位置づけるための文献の精読であり、分析・考察を世に問う論文発表と学会発表である。具体的中心となる研究計画・方法は、現地調査による「改宗仏教徒」に対するインタビューと参

与観察に基づく、改宗仏教徒たちの生活実践・儀礼実践と自己意識のありようの検討である。

現地調査の実施においては、既知である UP 州の V 村を主な対象地として、現地大学 (C. S. University, Meerut) の知己の研究者の協力を得ながら、特に以下の 8 つの問題群を設定の上、より多角的な観点から研究を行っていく。

(1) 第一に、女性を中心にすえた人間関係の把握に努める。これは、先行研究においてほとんど取りあげられることのなかった、ジェンダーという側面に光を当てるものでもある。仏教徒がきわめて少数である UP 州において、嫁ぎ先、あるいは嫁ぎ元の家族は、ヒンドゥー教徒である場合がほとんどである。彼女たちが取り結ぶことになる姻族関係は、どのようなものとなるのだろうか。

(2) 次に対象とされるのが、すでに生まれ、活動を始めている「改宗仏教徒」第三世代の人びとである。「改宗」という決意・行為を自ら行った第一世代や、実際に体験した第二世代について、生まれながらにして仏教徒であった第三世代の人びとにとって、「仏教徒である」という状況はいかに捉えられ、理解されているものなのだろうか。かれらの生活実践・儀礼実践や自己意識は、いかなるものであろうか。

(3) 第三に対象とされるのが、同一カースト (ジャーティ) 内における関係性、すなわち改宗仏教徒であるチャマルと、非仏教徒、つまりヒンドゥー教徒であるチャマルとの関係性である。かれらは、互いを、そしてまたそれぞれの宗教を、いったいどのように認識しているのであろうか。チャマルとしての意識と連帯感、宗教の相違とどのように関わっているのであろうか。宗教にかかわらず、チャマルの人びとが信奉の対象として挙げるラヴィダース (Ravidas) という中世の聖人に焦点を当てつつ検討していく。

(4) 第四に、同一村落内におけるチャマルと、調査村落におけるドミナント・カーストであるジャート (Jat) との関係の考察が図られる。1~2 世代前までは、富裕な土地所有層であるジャートとチャマルの間には地主-小作関係があったとされるが、近年、工場労働者の増加といった就業形態の多様化もあり、その関係性には大きな変化がみられる。またこの変化の前提には、チャマルがジャートより多数であるという村落内における人口構成、ならびにパンチャーヤト (村落会議) における優位性なども挙げられる。これらの状況を背景とした、両者の関係性の新たな形態について考察を行うものである。

(5) 第五に、広くは同じチャマルに属するとされながらも、近年の発展から独自のカ

ーストを主張するジャータヴ (Jatav) とチャマルとの関係性に焦点が当てられる。ジャータヴは、独立インド政府の施策である留保制度 (Reservation) の恩恵もあって、社会的に目覚ましい進展を遂げている「エリート」である。そしてまた仏教改宗運動の中心を担う存在でもある。チャマルとジャータヴは、それぞれが互いを蔑視する傾向にあるといわれており、両者間の接触は乏しいとされている。しかしそこに「仏教」という要素を導入することで、また違った関係性が浮かび上がってくる。すなわち、仏教改宗を主導し、仏教的儀礼を遂行するジャータヴと、改宗行為を行い、仏教的儀礼の遂行を頼るチャマルという関係性である。つまり、仏教改宗運動の推進・展開という観点からは、両者の強い相互依存・連携関係がみられるのである。

(6) 第六に、仏僧 (バンテ) と平信徒との関係性が考察の対象となる。仏僧は、仏教の教えを説き、仏教的儀礼を遂行し、時に読み書きも教えながら、村々をめぐる。そうした仏僧への平信徒の視線は、単純に崇拜したり従ったりするだけではない。仏僧自身の行為・言動などから、かれらなりの「評価」を下してもいる。仏僧個人の来歴 (いかにして僧侶になったか) や仏僧の組織 (サンガ) の研究なども、先行研究においてほとんど手つかずである。こうした、仏教改宗運動における仏僧の位置・役割と平信徒との関係性を検討することとなる。

(7) これまでの「空間的連続性」の検討とならんで、第七・第八の問題群においては、「時間的連続性」の考察におよぶ。まずは、過去との時間的連続性である。改宗とは、自らの来し方を直視し、それらを引き受けた上で、新たな道筋を見出す行為である。ここにおいて、改宗前後の祖先に対する観念の変移、具体的には、祖先崇拜の儀礼的实践の検討が行われることになる。さらには神話的祖先との関連から、起源神話も考察の対象となる。

(8) 次に検討すべき時間的連続性は、未来とのそれである。つまり、子孫に対する視角、姿勢である。子どもたちのより良き将来を望むのは当然であり、そのために重視されるものとして、まず教育がある。留保制度もあり、高等教育への道筋、またその先の政府職などへの道は以前よりも開けている。そうしたことから、熱心に教育をすすめるさまをみとることができる。そうした教育への意識、また実際の就学状況などが調査の対象となる。さらに、婚姻を結ぶ際の選択基準の考察が挙げられる。すなわち UP 州の改宗仏教徒においては、宗教の合致よりも相手の学歴や職などが優先事項として考慮されることが認められている。上記の (1) と合わせて、結婚に至るまでの過程から挙行、その後までを、

仔細に検討することとなる。

4. 研究成果

研究成果の代表的なものとして、まずは、現代北インドに生きる「改宗仏教徒」の生活実践とアイデンティティの諸相を主テーマとした博士学位論文（「現代インドの「改宗仏教徒」—ウツタル・プラデーシュ州における「不可触民」のアイデンティティの諸相—、2010年9月に京都大学より学位授与）を挙げることができる。本学位論文、ならびに、学位論文を元とした各種の論文や口頭発表は、いずれも、現代南アジア地域において焦点化されている被抑圧民・被差別民のアイデンティティのありようを検討するとともに、元「不可触民」とされる人びとが仏教改宗という方策をとることによって生じる葛藤や軋轢、交渉について、分析・考察したものとなる。

すなわち、本研究課題では、現代北インドにおける「不可触民」の仏教改宗運動と、かれらの自己意識ならびに生活実践・儀礼実践について、文化人類学的な調査研究を行い、かれら改宗仏教徒たちが、地縁関係においても親族・姻族関係においても多数派であるヒンドゥー教徒と、いかなる関係性を有し、またそれをいかに交渉しているのか、より多角的に把握し、分析・考察を行ったものである。

その際、とりわけ重視したのは、改宗前後の時間的（自らの過去・系譜への視点）・空間的（地縁・姻戚関係の交渉）連続性である。この観点は、改宗前後の断絶性を強調する先行研究に対して、また、アイデンティティ・ポリティクスの議論にのみ陥りがちなマイノリティの語り・主張に関して、他者とのつながりを志向する様相という、重要だが看過されがちであった側面を明白に示すものとなった。この考察の成果は、国際ワークショップやシンポジウムにおいて発表され、またその後、学術論文として英文 Web 雑誌に掲載されるところとなった。

また、仏教および仏教改宗運動の「社会性」の検討においては、インドにおける仏教改宗運動の祖である B. R. アンバードカル（仏教）認識にみる社会性、および、現代インドの仏教運動における社会性について、多角的に検討を行った。その成果については、「宗教と社会」学会のテーマセッション「社会参加を志向する宗教の比較研究—エンゲイジド・ブディズム（社会参加仏教）を考える—」において発表を行い、他地域・他宗教の事例との比較検討のもと、相互に考察を深めることとなった。

以上の研究成果は、とかく断絶的視角から捉えられる傾向にある「改宗」というもの、および、改宗教徒の生の様相に関して、他者とのつながりの希求をはじめとする、彼ら自

身が重視する連続的側面の重要性を明確に指摘したものである。またそこにおいて、改宗仏教徒たちが、いかに自らのアイデンティティを交渉・生成しているか、いかに他者との関係性のあり様を交渉しているか、精査したものとなる。

本研究は、大きく変化しつつある現代インド社会において、改宗仏教徒、ひいては、不可触民とされる人びとが、いかなるかたちで変容をみせつつ、生を送っているか、より詳細かつ深遠な研究考察のための重要な端緒となることと考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

Shinya Ishizaka and Kenta Funahashi, “Editorial: Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia”, *The South Asianist*, 査読無, Vol.2 No.1, 2013, pp.3-8.

(<http://journals.ed.ac.uk/southasianist/article/view/143/86>)

Kenta Funahashi, “Living as a ‘Minority’: A case of Buddhist-Dalits in contemporary Uttar Pradesh”, *The South Asianist*, 査読無, Vol.2 No.1, 2013, pp.28-39.

(<http://journals.ed.ac.uk/southasianist/article/view/145/83>)

Kenta Funahashi, “Negotiating with ‘Caste’: A Case of Buddhist-Dalits in Contemporary Uttar Pradesh”, *RINDAS International Symposium Series 1, Voices for Equity: Minority and Majority in South Asia*, 査読無, 2011, pp.19-27.

〔学会発表〕（計9件）

Kenta Funahashi, “Excluding Themselves?: Dalits Converting to Buddhism”, *International Conference, “Looking beyond the State: Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”*, 2012年12月21日, Japfü Christian College, Kohima, India.

Kenta Funahashi, “Living as a ‘Minority’: A Case of Buddhist-Dalits in Contemporary Uttar Pradesh”, *Japan-Edinburgh Workshop, “Social Movements and the Subaltern in*

Postcolonial South Asia”, 2012年10月17日, University of Edinburgh, Edinburgh, UK.

舟橋健太、「近現代インドの仏教にみる「社会性」—B. R. アンベードカルの仏教解釈から現代インドの仏教改宗運動まで—」、「宗教と社会」学会・第20回学術大会、2012年6月17日、長崎国際大学（長崎県）。

Kenta Funahashi, “Perspectives on the ‘Past’: The Development and Features of Dalit Movements in Colonial and Postcolonial India”, (Panel: Social Movements in Postcolonial India I, Panel Organizer), 査読有, A Special Joint Conference of the Association for Asian Studies (AAS) with the International Convention of Asia Scholars (ICAS), 2011年4月2日, Hawaii Convention Center, Honolulu, Hawaii, USA.

Kenta Funahashi, “Negotiating with ‘Caste’: A Case of Buddhist-Dalits in Contemporary Uttar Pradesh”, NIHU プログラム・現代インド地域研究・国際シンポジウム “Voices for Equity: Minority and Majority in South Asia”, 2011年1月22日、龍谷大学。

舟橋健太、「「過去」思考的運動—ダリト運動の展開とその特徴—」、(テーマ別発表: インド近現代史における社会運動—その共通性をめぐって—)、査読有、日本南アジア学会・第22回全国大会、2009年10月3日、北九州大学。

Kenta Funahashi, “Rethinking Leader-Follower Relations from the Perspective of the Difference of Castes: Case of a Buddhist Movement in Uttar Pradesh”, (Panel: Social Movements in Modern India: Rethinking Leader-Follower Relations), 査読有, International Convention of Asia Scholars 6, 2009年8月8日, Daejeon, Korea.

舟橋健太、「宗教間の「越境」と宗教実践の様式—現代北インドにおける「改宗仏教徒」の事例から—」、(分科会: 越境する宗教—宗教的「他者」はどのように「他者」でなくなるか—)、査読有、日本文化人類学会・第43回研究大会、2009年5月31日、大阪国際交流センター。

[図書] (計8件)

舟橋健太、「平等を求めて—現代インドにおける「改宗仏教徒」の事例から—」、京都大学学術出版会、速水洋子・西真如・木村周平(編)『講座 生存基盤論 第3巻 人間圏の再構築—熱帯社会の潜在力—』、2012年、207-238頁。

舟橋健太、「信じるもの／おこなうものとしての〈宗教〉—現代北インドにおける「改宗仏教徒」の事例から—」、春風社、吉田匡興・石井美保・花渕馨也(編)『宗教の人類学』(シリーズ 来たるべき人類学 第3巻)、2010年、3-35頁。

舟橋健太、「不可触民」、世界思想社、田中雅一・田辺明生(編)『南アジア社会を学ぶ人のために』2010年、60-73頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

舟橋 健太 (FUNAHASHI KENTA)
京都大学大学院文学研究科・研究員
研究者番号: 90510488

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: